

裏街、もしくはマーメイドの生成

小林 英実

その夜は金曜日だった。私はいつものように街を徘徊していた。半年前に離婚し、十二歳の娘と生き別れ、休日の予定は消滅した。待ち人のいない住居へは、早朝に帰宅するほうが熟睡できた。部屋の灯は侘びしく、空気は黴臭い。独り酒は娘への未練を呼び覚ます。冷えたベッドの独り寝は、自ら創作する悪夢にうなされるばかり。だから、私は街を彷徨した。鈍色の雲が星空を覆い隠す大都会の夜に、心模様は同化できる。彷徨えば、肉体は疲労する。酩酊すれば、雑念から解放される。星空の代替として煌めくネオン・ランプは艶めかしい。風俗営業の呼び込みや盛りを過ぎた街娼の視線に接すれば、猥雑ながらも生命の息吹を感じ取れる。殊に裏街の情緒はさすらう心に最適だ。

∴

大劇場と封切映画館が立ち並ぶ目抜き通りの裏街に、轟々しいネオン・ランプの看板が目に入った。大型テナントビルにある地下劇場だ。

『必見！ 舞姫十人 百花繚乱！ 裸のマーメイド人魚姫 遂に！今夜決定！』
私は単なるストリップ小屋の、陳腐なキャッチ・コピーに惑った。轟々しい三原色のネオンは道化師のようにおどけていた。呼び込みはいない。くすんだガラス窓のチケツト売り場に老女が座っているだけ。皺が際立つ厚化粧が嘔吐を誘う。傍らの電柱に、酒粕色の嘔吐物が吐きかけられていた。「お前のだよ」と私を嘲笑している。「たしかに」と頷くも、もはや過去の遺物。いまの私が欲しているのは、酒ではなく、*マーメイド*なのだ。私は老女に金を突きだした。

初秋の夜でも、まだ残暑は厳しかった。場内の冷房が肌の火照りを癒してくれる。客は八分の入り。私は二列目に席をとった。意外と広い座席は程よくクッションが効き、くたびれた私に安らぎを授けてくれた。

前方が半円形のステージに、銀色のミニドレスを着た純白の肌のダンサーが、媚態を作って愛敬を振りまいている。円らな黒い瞳と弾力性のある唇。ドレスのスリットを引き裂きそうな太腿は焼きたてのパンのようだ。しかし、踊りはぎこちなさを否めない。それは技量の乏しさゆえか。それとも、計算づくしの演技か。おそらく後者だ。

ダンサーは、白い羽根に、少しでも水色の羽根が混在した長いシヨールを小道具に、銀色のドレスを勿体つけて脱いでいく。風船のような豊胸は血管が浮きあがるほどに白い。大きな乳輪と小さな乳首の桜色が艶めかしい。水色のバタフライに隠された秘部への期待は、観客の煽情を心得ていて心憎い。

「久し振りだな、直人」背後から、私の名を呼ぶ低い声が、馴れ馴れしく肩を叩いた。振り返ると、大学時代の級友、大岡の笑顔があった。

「キュートだろう？おれのマーメイドだ」大岡は薄暗闇の中でも光沢を発するほど高級な、限りなく黒に近いミッドナイト・ブルーのスーツに身を包み、袖口からダイヤモンド入りのカフ・リンクスを輝かせていた。私には手の届かない代物。彼を、鏡の中の自分と見なしても、しがないサラリーマンの私には叶わぬ夢と諦観した。私は、微かに唇を歪め、大岡に笑みを返すも、すぐに彼の、マーメイドのバタフライへと視線を戻した。

「リリーっていう名だ」大岡はいつの間にか私の隣席に腰かけていた。「十二年振り。大学卒業以来だな、直人」

「大岡、お前、演劇の世界へ飛び込んだものではなかったのか？」私は彼に一瞥もくれずに、リリーというダンサーが勿体つけてバタフライを外す様を注視した。彼女が偽りのマーメイドたらんことを願って、闇の秘境を凝視した。

「芝居は芽が出なくてな。陳腐な三文芝居しか書けず、才能の限界を感じたよ。青春の蹉跎ってやつだ。成り行きで不動産業へ身を投じたら、時代の趨勢に乗じて、出世街道を驀進した。バブルはとうに崩壊したというのに、意を決して、三年前に起業した。いまや、錬金術師のごとき土地転がしさ」

「青年実業家ってわけか、社長」

「まあ、そんなところだ。経営者としての、リスクは覚悟しているが、人に指図されない自由気ままさが魅力だ。無味乾燥なサラリーマン生活とは異なり、スリリングだぜ。ところで直人、お前は、ディスクでナンパしたお嬢様と、学生結婚したよ

な?」

「できちゃった婚だ。作家を志していたが、お前同様に挫折した。妻子を食わせるために、サラリーマンへ転身せざるを得なかった」

「しかし、マスコミ系ではなさそうだな」大岡は私のくたびれたチャコール・グレイのスーツ姿を一瞥した。

「文学への未練を断ち切りたかった。だから、思い切って商いの世界を選択した。いまや、しがない商社の事務方だ」

「家族とはうまくやってるのか?」

「半年前に離婚した。娘とは生き別れだ。愛し合って結婚し、その後子どもを授かるのが、夫婦の王道というもの。しかし、デキ婚は汽車に乗ったのちに金を稼いで、切符を買うようなものさ。だから、途中下車の確率が高い。自ら経験して、世の常識を初めて理解した。愚かな人生だよ」

「それはご愁傷様。しかし、俺も似たような境遇だ。俺も演劇仲間と結婚した。子宝には恵まれなかったが、起業して、事業の立ち上げに没頭し、家庭を顧みなかった。今春、妻は男をこしらえて駆け落ちしたよ……」

私は大岡の話聞き流し、リリーの秘部に集中した。彼女はバタフライを外した。素早く反転すると、シヨールを天上へかざし、重量感のある尻を露わにした。瞬間、舞台は暗転した。観客は彼女の残像を追い求め、暫し闇に目を凝らすも、秘境は幻と化した。場内は溜息まじりの詠嘆に澁んだ。

突如舞台に灯がともった。蠱惑な笑みを称えて中央に立つリリーが、刹那開帳し、再び闇に消えた。場内に歓声と指笛が木霊した。私は魅力満点だと思っても、リリーが真のマーメイドでないと結論づけた。

「さて、お次は、エントリー・ナンバー九番、ジプシー・スカーレット嬢です!皆様、盛大な拍手でお迎えください!」

場内アナウンスの野太い声と同時に、スポットライトは、長い髪の痩身なダンサーを照射した。栗色の軟らかい髪に、小麦色に輝く肌。目尻が少しつりあがった切れ長の、鶯色の瞳は、涼しげに闇の一点を凝視している。長身の引き締まった肉体は、極小の黒いビキニをまとっているだけだ。

切れ長の瞳は踊り始めた。観客に媚態を作ることなく、客席を無人のごとく無視して、宇宙の空間を手繰るかのように闇を見据えた。重苦しく嘆くブルースのバラッ

ドに、時には抗い、時には溜伏して、華奢な肢体を鳶のようにくねらせた。Tバックから剥きだした尻は栗のようで、極小のブラジャーからはみ出した乳房は青林檎のよう。妖艶には無縁で、闇と戯れるしなやかな肢体。微かにめくれた上唇と高い鼻梁。切れ長の凜とした鳶色の瞳は、私を磁石のように吸い寄せる。私の心に青き春が蘇っていく。

「早く脱げ！」唐突に指笛が鳴り響いた。迅速に反応したいかつい目つきの、パンチパーマの中年係員が、にやけながら酔客に囁いた。頸へごつい親指を押し込むと、相手は素直に従った。

踊り子は気にも留めずに、正面のスポットライトを人差し指で射た。凜然とした瞳で闇の一点を凝視すると、見得を切った。瞬間、照明はフェイド・アウトし、女は闇へ同化した。

私を含んだ拍手は疎らだった。孤独な野獣たちの多くは、彼女の裸体を鑑賞できないことに失望したのだろう。

「直人、クレナイにご執心か？」

「クレナイ？」

「ステージ・ネームは、明るいスカレット。本名は、同じ赤でも対照的な深紅。クレナイという。渚育ちのお嬢様だ。お前は、しがないサラリーマンに落ちぶれても、審美眼は衰えていないようだな」

「何、学生時代には日常茶飯事だった、一過性の恋を夢見ただけだよ」

「正夢にしてあげようか？あの子はリリーの親友だ。一緒に食事に行こうぜ」

「叶うならありがたい」

コンテストの結果は三位まで発表された。リリーは見事に優勝をさらった。しかし、クレナイは選外だった。

大岡はビルの裏手にある楽屋口へ回り、横柄に手をあげて守衛に挨拶した。

「大岡社長、いつもお世話になっております」守衛は素早く扉を開けた。大岡が千円札を彼の手に握らせた。守衛は平身低頭した。

楽屋の狭い廊下を、私は大岡のあとに従った。

「リリーとクレナイは同じ楽屋だ」と大岡は一番奥のドアを二度ノックした。

高音の明るい返事が聞こえた。解錠された数センチの隙間から、リリーの円らな黒

い瞳が輝き、私たちを室内へ招き入れた。ドアを閉めるなり、リリーは大岡の胸に飛び込み、彼の唇を熱く求めた。

クレナイは私を見ていた。切れ長の、鳶色の瞳は柔和だった。演舞から解放された表情と思えた。

「こちら、直人。学生時代のクラスメイトだ。彼は君に、フォール・イン・ラブだぜ」大岡はクレナイにウィンクした。

「なんだ、わたしじゃないの、ダーリン」リリーは甘い声で私に刹那微笑を投げると、大岡の肩に頭をもたげて、ダイヤモンド入りのカフェ・リンクスを物欲しげにじくった。

クレナイはニヒルに唇を歪めて微笑した。私たちは暫し目を見交わした。クレナイの、凜とした鳶色の眼差しに、私は胸を射られた。

私たち四人はタクシーで五分足らずの閑静な街へ向かった。私を嘲笑する嘔吐物と、道化師じみたネオンの歓楽街からわずかな距離に位置する上品な佇まいの通りに、石堀に囲まれた鉄柵の門構えと幾多の蔦が絡み合う石造りの三階建てフランス料理店があった。しがないサラリーマンの懐では無縁の店。大岡はレストランの扉を堂々と押した。ロビーで受付嬢が鄭重に出迎えた。礼儀正しく教育された彼女の気品とともに、三階の個室へと案内された。

大岡は慣れた口調で飲食物を注文した。銀色のバケツに冷されたボトルの、ドン・ペリニヨンのロゼで乾杯した。淡紅色の発泡は、澄明に美しく、少し酸味を帯びた香味がした。私には不相応な味。きつい炭酸を卑しく摂取すれば、嘔吐は必至と感じた。

「リリーの優勝に！」大岡の低音はよく通った。

「なんでも一番は最高！」リリーは無邪気に笑った。

無言で微笑するクレナイは、シャンパンを一口舐めると、壁に飾られた小さな絵を眺めた。そのヴィヴィッドは、赤いサイロのある牧場で、一頭の牛が牧草を食べている情景だった。

食事中の話題は、リリーのダンサーとしての夢——世の男性に愛を献げて虜にし、現代の出雲阿国をめざすという超然さと、大岡の高級シャンパンのように弾ける不動産投機の話に終始した。それらは、私にとっては画餅。欲望という虚ろな

事象としか思えない。私の心は、ヴィヴィッドを眺めるクレナイに傾倒していた。クレナイは寡黙だった。シャンパンには手をつけず、時折、隣席の私に切れ長の瞳を流してくれた。

メイン・ディッシュ後、デザートは屋上で食べようと大岡が告げ、私たちは移動した。初秋の夜風は、多少の湿気を残すものの、上着を脱げば快適といえた。夜空の星は相変わらず鈍色の雲に遮蔽されている。屋上からは巨大な歓楽街が一望できる。私はクレナイとともに、マホガニーのテーブルがある二人掛けのカウチに座った。クレナイは、下肢に密着した濃紺のジーンズを履き、白いタンクトップに、黒いスウェードのベストを羽織っていた。彼女は赤白茶の、三色のアイスクリームを食べ、私はエスプレッソとヘネシーを嗜んだ。

「君、お酒、飲まないの？」

「好きじゃないの。たとえ酔っても、世の中、何も変わらないでしょう」ハスキーな声は冷静に世間を見つめていた。憂さ晴らしのツールとして酒を浴びる私にとっては、心痛の至りだった。

大岡とリリーは二人だけの世界に埋没していた。幸福そうな笑いと愛の囁きと愛撫を奏でる二人にとって、夜空には星が輝いて見えるのだろうか。それとも、日々の繰り返しを刹那の快楽に転化させているだけなのか。それは、私にとってはどうでもよいことながら、私が忘れてしまった恋というものなのかもしれない……。

「君、クレナイと呼んでもいい？それとも、緋色のスカーレット？」

「プライベートなら本名でいいし、ビジネスならステージ・ネームで呼んで」

「では、クレナイと呼ぶよ」

クレナイは微かに唇を歪め、私を見た。慄とした瞳は再び私の胸を射た。

「クレナイ、君はなぜ脱がなかったの？」

「脱ぐなんて愚問ね。わたしは裸を見せるために踊ってなんかないわ。ましてや、リリーののように、男を勃起させるためでもなければ、うたかたの恋情を授けるためでもない。ただ、踊りたいだけ。ただ、闇に潜むわたし自身の自我を発見したいだけよ」

「それは美の探究ということ？」

「まだ模索中。手がかりをつかもうとしている段階ね」

「ならば、踊る環境を選んだほうが得策では」

「基本的には現代舞踏が主戦場よ。でも、たまには、世俗の反応も見てみたいし、それにリリーの、キュートさの根源を見極めたいしね。わたしには、彼女のような天性の可憐さが欠落してるわ」

「でも、彼女が持ち合わせていない、狂おしいクールさを備えている。ナチュラルにだよ」

「男女問わず万人を魅了できなければ、美とは言えなくて？」

「美は万人共通のものなのかな。十人十色に感じるものだろう。普遍的な美など存在しないよ」

クレナイはシニカルな笑みを浮かべて流し目を返した。

「直人、あなた、何色が好き？」

「紺。厳密には深藍」

「わたしは赤ね。厳密には、名前のおり、深い紅。人は十人十色でも、大別すると、赤か青が好きだと思うわ」

「太陽と空だね。誰もが、いつも目にする色だ」

「ある意味、黒と白も同義かな」

「闇、イコール、心。白は幸福？いや。郷愁だ」

「雲よ。自由奔放で、幸せに見える、希望よ。ねえ、散歩しない？リリーたちも、ベッドへ行きたくてウズウズしてるしさ」

私たちは、大岡とリリーを残して退席した。予想どおり、勘定は大岡が払うと言った。私は遠慮なく謝辞を述べた。

クレナイは、ストリップ劇場の傍に駐車した車を取りに戻りたいと告げた。私たちは歓楽街へ向かった。真夜中を過ぎ、レストランのある通りは惰眠していた。静寂から喧騒への道のりは、裏街が私を呼び戻している錯覚にとらわれた。

「直人、あなた、最近離婚したそうね。リリーが化粧室で教えてくれたわ。何年暮らしたの？」

「十二年」

「お子さんは？」

「娘が一人」

「では、いま、好きな色はブルー？それとも、黒？」

「今夜からは、赤が好きになったよ」

「直人、わたしと寝たいのね」

「顔に書いてあるだろう」

「でも、世俗のことを、何もかも忘れさせてあげられる自信、ないわよ。それに、新たな愛だって、芽生えないかもね」

「しかし、恋の可能性はある」

「恋なんて、刹那な戯事よ」

「でも、恋をすると、白が好きになると思うよ」

「そうね。でも、白い雲はやがて灰色になり、心に雨が降るわ。陳腐なメロドラマよ」

「美は不変なれども、愛は不毛というわけだね」

「人は孤独を好み、孤独は人を裏切り、人は愛を求めて、巷をさすらう。世は自明なれども、人は愛に救いを求める」

「救いは、やがて忘却を生み、忘却は倦怠を誘発する。倦怠は渴きを訴え、雨を望み、人は雨に打たれて、心を閉ざす」

「わたしたち、気が通じ合うのかしら」クレナイの頬が微かに綻んだ。

「そう願えれば、幸いだ」私は彼女を見つめた。クレナイは私の手をとった。私たちは長い間目を見交わした。

「ねえ、直人、ドライブしない？わたし、海辺に住んでるの」

「いいよ。どうせ、あてどない旅の途中だから」

真夜中の歓楽街は、早暁を拒絶するかのようになり、日中と大差なく躍動していた。路肩の嘔吐物は、私に嘲笑を投げかけるも、本心は明らかに嫉妬していた。恋の戯事は人生の繰り言かもしれない。だが、私は、街が幻惑する快楽よりも、恣意的な旅のロマンスが気に入った。

クレナイの運転する深紅のスポーツカーは、喧騒を排気ガスで霧散して街を飛びだした。彼女の自宅までは、深夜とはいえ二時間を要するらしい。彼女は冷房を好まず、窓を開けて涼風を入れた。いつしか、夜風は朝風へ、そして潮風へと変遷した。風は、私の酔いを醒まし、睡魔を退散させ、私のクレナイへの愛欲を募らせて、彼女の心模様を推理させた。朝焼けの海面は鏡の反射のように光彩を放ち、細波は静かなコンチェルトを奏でている。クレナイの、風になびく栗色の髪は、私に新鮮な潮の香りを運んでくれる。彼女の風で露わになった耳朵は果実のようで、私を煽

情させる。しかし、凜とした切れ長の眼差しは、私の欲望を消沈させる……。

「直人！わたしを抱きたい？」クレナイは風に負けないくらい大声で叫んだ。

「もちろん！」

「わたしも、あなたがほしい！」

スポーツカーは、サーファーたちがウェット・スーツに着替えている浜辺の公共駐車場を通過し、小島に繋がる道路とヨット・ハーバーを通過した。レストランやサーファー・ショップの軒並みを右折して、緩やかな勾配をのぼると、迷路のような住宅街の隘路を何度もターンを繰り返して、瀟洒なヴィクトリア朝の屋敷前で停車した。

クレナイは、運転席にあるリモコン装置を鉄柵の門へ向け、ボタンを押した。門扉が自動的に開いた。彼女は車を敷地内に入ると、再びリモコン装置のボタンを押して閉門した。

ヴィクトリア調の屋敷は荘厳だった。単なる場末の、芸術肌のストリップパーと軽視していたクレナイを、私は刹那畏怖した。

「驚いた？委縮しないでよ。大事なもので萎えちゃ、わたしの肌の火照り、收拾がつかないわよ」ガレージに車を収納したクレナイは、ニヒルに笑うと、両腕を私の首に絡め、私の唇を軽く吸った。柔らかな感触だった。

「誰もいないの？」

「独り暮らしよ。二日おきに、家政婦が掃除洗濯にやって来るけれど、それ以外は、わたしの、孤独の郷よ」

「親御さんは？」

「海の向こうにいるわ。そんな低俗な穿鑿はよして。さあ、中へお入り」私は彼女に手を引かれ、豪邸の、二階の、海側の寝室へと導かれた。

「シャワー、浴びる？それとも汗臭いままがお好き？」クレナイは私の上着を脱がせてタイを解くと、シャツのボタンを外し、私の乳首を強く吸った。

「君はどちらが好みだ？」私の声は武者震いしていた。

「どちらも好きよ」

「では、最初は汗臭いまま、二度目は石鹸の香りの中で昇天しよう」

「二度なんて、タフね」

「ただの色情狂さ」

「わたしもよ」

私たちは烈しく求め合った。

日差しの強さで目が覚めた。開け放たれた窓からそよぐ涼やかな潮風が、私に幸福を運ぶ。青空に水彩画のような白い雲がたくさん浮かんでいる気分だった。

「直人、一度でダウンなんて、見かけ倒しね」片肘をつき、頭を支えて横たわるクレナイの裸身は、陽光を凌ぐ輝きだった。樺色の乳首と引き締まった腹部と栗色の薄い陰毛が眩しい。私は彼女の唇を濃厚に吸った。

「駄目よ。第二ラウンドはシャワーを浴びてからでしょう？ さあ、バスルームへ」
私たちは、海に見えるバスルームで、ぬるめのシャワーを浴びた。お互いの裸体に石鹸を塗り、素手でそれを泡立てた。私は彼女の引き締まった発條のような肉体に、極度に興奮していく。彼女もまた、憤った私の股間から手を離せられずにいる。私たちは立位のまま彼女の背後から一体化した。

「直人、ここで果てないでね。フィニッシュはベッドですよ……」彼女の一言は、私のエゴイステイックな欲情を、二人が共有すべきエクスタシーへと浄化させた。

ベッドでの事後、私たちは湯槽に浸かった。ぬるま湯にシャボンをつたぷり泡立たせた甘美なひと時は、ゼンマイが伸びた目覚まし時計のように、時刻を告げることなく停止していた。窓外の海は優雅に波を浜辺へ運び、青い空と白い雲は夢を語り、潮風は憂き世を忘れさせた。私の耳には、初秋だというのに、冬の候鳥である鷗の白い羽ばたきが聞こえた。

唐突にクレナイは湯槽に潜った。彼女の唇は、私を頬張り、奮い立たせると、私の全身を挑発的に這いずった……。

「わたし、水の中が好きなのよ」クレナイは馬乗りになると、私を自らへと導いた。水中での行為は、女性にとって潤いを殺ぎ苦痛だと前妻に拒絶されて以来、強要してはいけないものと思いついていたが、彼女の潤いは水を凌駕していた。三度の交接で気づいたことは、彼女と私の性器は完璧に符合するということ。もしかすると私たちは、この世に誕生する以前に、ジグソーパズルのピースのように、凹凸を分離されてから生まれてきたのではないのか。生涯においてクレナイは理想の極みだ。私は夢想到底に酔い痴れた……。

私は黄昏まで眠った。目覚めたとき、夕風のせいかわ、潮の匂いを感じなかった。

クレナイは、私を見つめながら、唇を少し歪めて微笑していた。涼やかな眼差しと脂肪ひとつない肉体。乳液を塗ったような肌の感触と栗色の陰毛。彼女のすべてが色褪せずに存在した。

「ねえ、直人、エネルギー補給しない？ご飯。秋の夜長のために、たくさんのカロリーを摂取するの。それに、明日の昼下がりに、ヨット・ハーバーで、外見はゴージャスだけれど、中身はチープなパーティーがあるわ。少し服を買いましょう。直人、わたしをエスコートしてね」

「それは問題ないけど、クレジット・カードが使える店にしてほしいな。持ち合わせが少ないんだ」

「お金なんて気にしないで。わたしからのプレゼントよ。直人は、わたしの無為な時を有意義にしてくれる人だから」

私たちは、クレナイの、深紅のスポーツカーを駆って海岸線へ出た。彼女は、迷路のような高級住宅街を、慣れたハンドルさばきで浜辺の商店街まで出ると、サーファー・ファッションを中心とした洋品店に停車させた。

私はクレナイが見立てるままに従った。彼女は白いショート・パンツに草色のタンクトップ姿だった。私のためにブルーと白のジーンズ、短パンやシャツ、下着類、そして、ビーチ・サンダルとワラビー革製のデザート・ブーツを購入した。

「ねえ、ジョー、『ラグーン』でデイナーしてるから、ジーンズを裾あげしたら届けてくれる？」クレナイの涼やかな眼差しに、ジョーと呼ばれる店主らしき男は慇懃に一礼した。

私も彼女に命じられるままに、くたびれたチャコール・グレイの、スーツのズボンと、昨日から着ている汗臭い白のドレス・シャツを脱いだ。クレナイとペア・ルックのような白い短パンを履き、アロハ・シャツの、裏地柄のボタンダウン姿に変身した。「靴はワラビーを履いて。もちろん素足だよ。それから、腕時計は外しましょう。わたしたちに時は刻まないから」

私たちは、トランクに買物袋を収めて、次の目的地へと向かった。

「ちよっと買いきすぎじゃない？」

「しばらくの間、わたしのそばにいてほしいからよ。仕事が心配？サラリーマンには有給休暇という正当な権利があるはずよ。あなたは、明日盲腸炎になって緊急入

院するの。あるいは、離婚が原因で、鬱病を患い、療養生活を送ってもいいわ。鬱病なら最低一か月間の加療が必要だから、それが妙案ね。診断書はわたしのホーム・ドクターに書いてもらおうわ」

クレナイの涼しいウインクは、反駁の余地を許さなかった。彼女に服従すべきと私は従順に頷いた。しかし私はいったい、いつまで、彼女のもとに留まるつもりなのか？クレナイは時刻を止めたがっているが、時が刻まれるのは必然だ。私はこの境遇に甘んじ、生き別れた娘の面影を忘れようとしているだけではなからうか……。

次の目的地は、数百メートル東方の、商店街の外れにある高級紳士服店だった。

「直人、あなたの肌の色には、薄いブラウンが似合うわね」クレナイは、麻が混合した金茶のジャケットと白に近い薄茶のズボンを見立ててくれた。ドレス・シャツは白と薄いブルーのボタンダウン・シャツを選び、「明日の天気で、どちらを着るか決めましょう。晴れなら、雲に乗った気分です。曇りなら、憂う心模様に合わせて、ブルーのシャツよ」と私の髪をクールに撫でた。

「雨なら？」

「もちろん、欠席ね。ねえ、社長、明日の正午までに手直ししてください？ いただきにあがるわ。パーティがあるの。ついでに、茶色の、いえ、浜辺だから、白いモカシンのような靴も見繕ってくれるかしら」

初老の、洒脱な社長は鄭重に返答した。

「それから、来週末までに、彼に似合うフォーマルなプレタポルテを、そうね、限りなく黒に近いミッドナイト・ブルーのスーツ。靴もシャツもタイも、シックにきめてくださる？」

店主は綿密に私を採寸した。限りなく黒に近いミッドナイト・ブルーの、プレタポルテのスーツ。ダイヤモンド入りのカフ・リンクスをつければ、大岡と酷似する。私は彼の分身なのか？ 私はクレナイと大岡との過去を疑った。邪推も甚だしいと打ち消そうとしても、嫉妬は脳裏から立ち去らない。だが、現在クレナイと結ばれているのは私だ。私に遍歴があるように、彼女の過去がいかなるものであるうとも、過去の遺物にしかすぎない。夢のようないまを生きるのだ。私は思料を払拭しようとクレナイを見た。彼女は涼やかな笑みを浮かべて、私の髪を撫でた。

レストラン『ラグリーン』へ到着すると、二架の松明が燃え盛る入口に、ジョーが白い紙袋を提げて待っていた。クレナイは彼に千円札をチップとして渡した。

私たちは、『ラグーン』で分厚いビーフステーキを平らげたのち、再びベッドで密着した。しかも、三度。クレナイの、発條のような肉体と涼風の微笑は、私の脳裏から減退という言葉を削除してしまつたらしい。同時に過去も。私は時が刻まれない気がしてきた。

翌朝は快晴だった。昼下がりから開催されるパーティーへは、白いシャツをノー・タイで着用した。洋品店に立ち寄り、着替えたとき、クレナイは私の胸ポケットに薄紫のポケット・ハンカチーフを挿入した。クレナイは、肩を剥きだしにした深い紫色の、サテン地のミニドレス姿だった。深い紫色は、彼女の、小麦色の肌と均整のとれた肢体を艶やかに演出していた。

パーティーは、浜辺から吊り橋で繋いだ小島にあるヨット・ハーバー横の、白い二階建てレストランを貸し切って催されていた。ガラス張りの一階を開放した会場の外には、円形テーブルと椅子が数セット用意されていた。

私は左手にシャンパン・グラスを持ち、左腕にクレナイの右腕を絡めて、彼女が挨拶を交わす先々の人混みを、高速道路の渋滞で車線変更を繰り返す車のごとく巧みにかわしながら、彼女をエスコートした。そう、私はこの会場における彼女の愛車なのだ。

クレナイが紹介してくれた人々は、老若男女、多種多様だった。概ね洗練された人々だったが、どの参加者も、私にはスクリーンに映写される映像に感じた。彼らとの会話は引き潮のように遠のき、面影さえ浮かばない。

クレナイはシャンパンを一口舐めると私に渡し、シャンパン・グラスに注いだジンジャー・エールを飲みながら、映像たちのお相手をしていた。私はダイキリを二杯飲んだ。昼間のアルコールは私の脳を刺激した。いまは、すでに三杯目の、スコッチのオン・ザ・ロックを舐めている。

クレナイが化粧室へ行っている間に、私は外のテーブルに席をとり、ヨット・ハーバーに碇泊する船舶を眺めた。細波に揺れる白い光景は、どこか夜の、大都会の裏街に似ていた。いや、単にネガ・フィルムのごとく、陰陽の反転による錯覚だ。唐突に、娘の笑顔が白い雲に乗って現れ、感傷的になったのだらう。否、裏街の嘔吐物の代役として、冬の候鳥であるはずの鴉が白く羽ばたき、酔漢の私を愚弄したせいで……。

「退屈なようね」クレナイは背後から私の首に両腕を回し、私の唇を軽く吸った。

「そんなことはないよ。ほら、あの中年紳士、自慢のクルーザーへ女の子を連れ込もうとしている。これで五人目だよ。金だけじゃ、女はなびかないのかね。皆、甲板止まりで下船してしまうんだ。彼は必死に船底のベッドルームへ誘い込もうとしているのにさ。哀しいね、人生ってやつは」

「あら、五人なんて、わたし、そんなに長い時間、あなたのもとを離れていたの？」

「いや、室内にいたときから、ずっと観察してただけだよ」

「やっぱり退屈なんじゃない」

「そうじゃないよ。ただ、君がほしただけさ」

「わたしもよ。帰りましょうか。直人にこの陳腐さを見せたかったただけだから、もう、目的を果たせたわ」

くねくねとして、迷路のような隘路の坂道を、クレナイは巧みなハンドルさばきで自宅へのぼっていく。私の酔いは潮風によって幾分和らぐも、依然として鷗の白い羽ばたきが脳裏に居座っていた。

「今度はいつ踊るの？」私はクレナイの軟らかい髪を撫でた。

「わからない。お呼びがかかったら。いえ、あなたに厭きたときかしら」

「なんだ、結局棄てられるのか。僕は使い捨てライターってところだね」私は彼女の耳朶を指先で愛撫した。

「あら、冗談よ。でも、現実には、あなたが先に飽食するかもね」クレナイは凜然とハンドルをさばいていた。

「そんなことは、あり得ない。君はまさに理想の女性だから」

「肉体的にでしょう」

「いや、詩的にだ」

「それ自体が詩的ね。あなたこそ、わたしの理想よ」

「運命的な出逢いとでも？」

「運命なんて、単なる偶然のめぐり合わせよ。あなたは必然。あなたとの肉体の合致は、天国へ近づいた瞬間。人は恍惚と呼ぶのかもね」突如クレナイは、前方に注意を払おうともせず、私の唇を烈しく吸った。

「棄てないで。とわによ」と語気を強めると、凜々しく前方を見据えた。

私はなぜか夢の中にいる気がした。いや現実だと改心すると、風になびく彼女の軟らかな髪を撫で続けた。

翌朝、私は会社へ病欠の連絡を入れた。病因を、人生への悔恨と絶望に転嫁して、脈絡なく語った。直属の課長は、表面的な優しさで、二、三日の休養を諭した。私は胸のつかえから解放されて、少し元気になった風を装った。「お大事に」という怠惰な彼の言葉は、却って私に安堵を与えた。

二日後、クレナイのホーム・ドクターに作成してもらった『抑鬱症につき、一か月の加療を要する』という診断書を郵送した。その後は、たしか社会保険の適用で、二年間は基準内賃金の六割が保証されるはずだ。そのうちの半分を娘の養育費に割り当てたとしても、クレナイの家に住んでいるかぎり、十分に生活できる。だが、私は二年間も、彼女の愛を享受できるのだろうか。この夢のような世界で眠り続けることが、果たして無限に可能だということか？私は彼女が言うことを信じ込むことにした。

屋敷の地下には、壁一面を鏡張りにし、フローリングされた稽古場があった。百平米はある空間で、クレナイは毎朝レッスンに励んだ。最初のうち、私はただ見学するだけだったのだが、彼女から乞われたチェック・ポイントを監督するうちに、学生時代に培った演劇への情熱が覚醒し、指導に熱がこもっていった。

レッスン後、私たちは、シャワーを浴びて、情を交わし、朝昼兼用のブランチを人出の減った海辺の、白い木造の一軒家のカフェで摂り、穏やかな天候ならば、砂浜で読書したり、散策したりしたのち、食料を購入してから帰宅する。ディナーは自宅で、彼女か私が料理をし、ワインを飲み、再び情を交わしてから入浴するか、入浴後に肌を合わせるか、それはその日の気分しだいで前後する。それが平日の日課となった。週末の土曜日は外食し、日曜日は陳腐な虚栄のパーティーに参加するのが習慣化した。

私は、毎日最低二回は彼女の中で到り、週に二、三日は、その倍のエクスタシーを味わった。彼女は最初の営み以来、一貫して避妊を拒んだ。しかし、いまだに妊娠の兆候は見受けられない。

彼女は月に一回程度、都心の劇場で舞踏を披露した。だが、あの裏街の、ストリッ

プ劇場のようなステージに立つことは二度となかった。

その点について彼女に尋ねると、ストリップテイーズの舞台はあの夜が最初で最後らしく、「わたしは、単にあなたを誘惑しに行っただけよ」と唇を歪めて微笑した。

「僕のことを大岡から聞いていたの？」下卑た嫉妬が胸中に再燃した。

「まさか。彼とはあの夜が初対面よ」即答したクレナイの眼差しは、事実を物語っていた。私は、大岡の分身でないことに安堵しながら、自らの矮小さを愚かに思った。

「では、リリーとも？」

「いいえ、彼女はかつて現代舞踏と一緒に習っていた、無二の親友よ。わたしは、あの裏街へ、わたしの理想を探しに向向ただけよ」

「美の？」

「いえ、いつも夢の中に出現するアニメス、あなたに出逢うため。そして、あなたは理想どおりに生成したわ。狂おしいほど魅力的にね」

「僕も君に耽溺している」

「ならば、あなた、わたしの途中で溺死したい？」

「その前に肉体が疲弊してしまうかもね」

「そうになったら、わたしの子宮の中で眠ればいいのよ」

「死ぬまで？」

「再び誕生するまで。時は刻まれていないわ」

「では、誕生はいつ？」

「あなたがわたしに厭きないかぎり、とわに起こり得ない」クレナイは、唇を微かに歪めると、私の唇を柔らかく吸った……。

幾月かが過ぎ、幾年を経たのか、私は記憶にない。もしかすると、時が制止したままだったのかもしれない。いや、たしかに季節は移り変わっていた。

樹葉が朽ちて、木枯らしの塵芥となった。波が荒ぶり、潮風が寒気を運び、人々は自ずと浜辺から遠のいた。冷えた空気が澄明になり、遙か彼方に聳える芙蓉峰の雪化粧が美しく映える冬を越すと、のどかな陽光が心を温暖にした。桜が街を彩るも儚く散り、湿気が心身を鈍重にさせる五月雨は、紫陽花を美しく見せるためにのみ存在した。力強い太陽が肌を焦がす夏の海は、暑さに優る熱情に胸を躍らせるも、やがて涼やかな空気とともに秋を迎えた……。

四季が二順したことまでは、私の記憶に残るが、いまが何周期目の秋なのか、すでに見当がつかない。娘への仕送りは、収入がある間は自力で継続していたが、いまはクレナイにすがっている。娘の面影は、毎日脳裏をかすめるのだが、彼女は十二歳以上成長していない。現在は十代後半なのか、もしかすると成人しているのかもしれない。会いたいという衝動に駆られても、クレナイの抱擁とともに、水泡に帰す日々が続いていた。

ある平日のダイナーの折、クレナイは舌平目のムニエルを魚用のナイフで丁寧にフォークへ乗せると切りだした。

「直人、今度の週末に、発表会の出演依頼が来てるの。どうしたものかしら」
いつものイベントなのに。私にはクレナイの逡巡が不可解だった。

「それがね、会場はあなたと出逢った街なのよ」

「ストリップティーズか？」

「まさか。以前にも説明したでしょう。あれは、あなたを誘惑するための手段だったと。会場は、あの劇場の表通りにある公会堂よ」

私は、あの裏街に吐きかけられた、酒粕色の嘔吐物を想起した。

「今回は、あなた、ここで留守番してて」

「なぜ？やはり僕に見られたくないパフォーマンズなのか？」

「断じて違うわ。でも、この家で、わたしの帰りを待っていてほしいの。なぜなら、あの裏街へ行けば、あなたは雑踏に呑み込まれてしまう気がするのよ……」

「莫迦な。僕は君の中に埋もれて生きていくと誓った。それこそ、断じてあり得ない」

「でも、わたし、怖いよ」

「心配ない。僕は君から離れずに行動する。楽屋ではつきっ切りだし、演舞中は客席の最前列で鑑賞する。誓って、君の視界から消えないよ」

「そうね……」クレナイは切れ長の瞳を伏せて頷いた。再び開いた鳶色の瞳は翳っていた。夢現を知覚するまで、私はその翳りが何であるかを理解できなかった。

クレナイの運転で、私はあの裏街がある繁華街へ舞い戻った。街は相変わらず鈍色の雲に覆われ、ネオン・ランプが色づき始めた雑踏の喧騒は、どこかしら潮騒を連想させた。

開演前の楽屋で私は、舞台用に変容していくクレナイの姿を見届けた。切れ長の瞳はきつめにつりあげられ、軟らかい栗色の髪はひとつに束ねられた。眩耀な小麦色の肌は黒いレオタードに封印された。いま彼女は夢現の狭間にいた。

舞台監督が彼女の出番を告げにきた。私は彼女の唇を欲した。しかし、舞台への集中を削ぐと自重した。彼女の手を握り、刹那目を見交わしたのち、開場前に押さえおいた最前列の客席へ移動した。彼女の出番を待ち焦がれるも、彼女は一向に姿を現さず、ついには、クレナイの次の出演者が舞台に登場して踊り始めた。厭な胸騒ぎがした。私は楽屋へと疾駆した。厭な予感とは、基本的には的中するものだ。楽屋から彼女の姿は消えていた。

私は、舞台の袖で進行を見守る舞台監督に、彼女の所在を尋ねた。彼は、クレナイは気分が悪いと出番直前にキャンセルしたことをビジネスライクに告げると、すぐさま舞台の踊り子へ視線を集中させた。

駐車場へ行くと、やはり深紅のスポーツカーはない。クレナイは私を置き去りにして帰宅したのか。もしくは、私に厭きたのか。もしかすると、初めから存在しなかったのか？私は混乱した。冷静になろうと努めるも、こめかみが烈しい鼓動を打った。まずは彼女の家へ引き返そう。私は裏街に呑み込まれることなく、電車に乗って海岸線へ引き返した。

海岸線の、無人駅のプラットフォームに掛けられた時計の指針は、午後十時を差していた。私は、たぶんこの駅が、クレナイの屋敷に一番近いと推し量って下車したのだった。線路沿いの商店街を北へ右折し、くねくねした隘路の坂道を当てずっぽうにのぼってみた。丘の上の行き止まりに、彼女の、いや、私が何年も暮らしているヴィクトリア朝の洋館があるはずだった。しかし私は、屋敷にたどり着けない。慣れない夜道のせいなのか。いつも深紅のスポーツカーの助手席で、クレナイばかりを見つめていたせいなのか。私は彼女のアドレスを見出せずに焦躁した。

緑色の公衆電話が、店じまいした煙草屋の軒下に見つかった。最初から電話をすればよかったのだ。クレナイは必ず帰宅している。私は受話器をあげた。しかし私は、彼女の家の電話番号を知らない。屋敷に電話機はあったが、着信音を聞いた記憶はない。私は途方に暮れた。夢から目覚めたように辺りを見渡した。

私はいまだどこにいる？海岸線を間違えたのか。いや、たしかに私はこの街で暮らし

ていた。私はこの街を、暗闇の中で歩いたことがないだけだ。いや、日中さえ徒歩は一度たりともない。このくねくねした隘路は、複雑な迷路なのだろう。車に乗っているかぎりは単なる道路なのだが、この煙草屋の存在すら記憶にない私は、クレナイの中でのみ暮らしていたことになる。クレナイを除く私の記憶は、潮騒と潮の香りと、鷗の白い羽ばたきだけだ……。出直そう。明朝、普段どおりに、まずはブルランチのカフェから。明日は日曜日だ。ヨット・ハーバーのパーティーへ出向いて彼女を探そう。いや、朝日とともに、まずは彼女の屋敷を探し当てるのだ。だがその前に、私はどこで宿を取る？あても、手持ちも少ない……。

私は、終電車が過ぎ去ったプラットフォームへ線路伝いに忍び込み、限りなく黒に近いミッドナイト・ブルーの上着を毛布代わりにしてベンチに横たわった。初秋とはいえ、夜風は肌を冷やした。体は小刻みに震えた。寝ようと試みても、神経は昂ぶり、結局、私は一睡もできずに払暁を迎えた。

私は、始発電車が到着する前に、線路伝いに駅を脱出し、海岸線へ出た。まずは、坂道へ入る右折路を探し、微かな潜在下に眠る記憶を手繰り寄せて、迷路の謎を解こうと試みた。

右折路はすぐに判明したが、くねくねした隘路の坂道は蜘蛛の巣のようで、私を混乱させた。私の磁石は、潮騒の方角と潮風の方向頼りだった。それさえ定まれば、いつしか鷗が白く羽ばたき、クレナイのもとへ導いてくれる予感がした。しかし、潮騒は四方八方から聞こえてくる。潮風も気紛れに方角を変えるばかり。鷗は幻にすぎない。クレナイの、ヴィクトリア朝の屋敷はどこにも存在しない……。

私は海岸線へ引き返し、ブルランチを摂るカフェを探そうと試みた。しかし、毎日のように訪れた白い一軒家の、どこにでも存在する特色のないカフェは、浜辺であること以外にアドレスの片鱗すら思い出せない。熟考すれば、私は、レストラン『ラグリーン』も、ジョーのサーファー・ファッション店も、高級紳士服店も、クレナイとともに訪れたすべての所在地を、まったく記憶していないのだった。いや、私には唯一確実な記憶がある。浜辺から吊り橋で繋がる小島のパーティー会場だ。白い二階建てのレストラン。クレナイの足跡をたどれる唯一の手がかり。私は重くなった足を引き摺りながら、二キロ近い道のりを経て、ようやくパーティー会場を探し当てた。

白い二階建てのレストランは開店前だった。パーティーは昼下がりから開催されるのが通例だ。私はもはや腕時計を身につける習慣を忘れてしまった。窓越しに、薄

暗闇の店内を窺い、時計を探した。店は荒廃していた。店じまいして長い歳月を経ているのだと悟った。海辺の街は私に別れを告げようとしている。私に裏街へ帰れと示唆している。海岸線は、私には相応しくない街だと。ならば、クレナイは、私には不釣り合いな相手ということになる……。

私は、レストラン前に野晒しにされた椅子に腰かけた。ヨット・ハーバーに碇泊する船舶を茫洋と眺めているうちに、深い眠りに落ちた。

∴

携帯電話の、けたたましい着信音で目を覚ました。意識が急速に現実へと引き戻されていく。

「ご苦労さん……。わかった……。明日、銀行へ再度お願いしてみる。明朝までに、販売計画書と直近の試算表、それから、向こう半年間の資金繰り表を用意しておいてくれ」と告げると、私は電話を切った。

闇に包まれた室内は静謐だった。カーテンを開けると、窓外の、夜空に聳える高層ビル群のライト・アップが目映かった。部屋の面積は一LDKながらも百平米を下らない。そう、ここは、都心の高層コンドミニウム。これが私の自宅。現実の私……。

私は一時間ほど前に、徒歩十分に位置する事務所から帰宅して、うたた寝をしていたのだった。私は、夢の中にしか存在しないアニメ、クレナイを深く思った……。離婚後半年間に、これで私はクレナイの夢を三度見たことになる。目覚めの現実は、昂ぶる夢の感動に、いつものように冷水を浴びせかけた。しかし夢は、偶然のめぐり合わせという運命を、いつか実現できる、と予言している。私は夢を信じた。愚かで、憐れな男だと自嘲するも、諦観する気にはなれなかった。

私は、シャワーで汗を流したあと、ワードローブから限りなく黒に近いミッドナイト・ブルーの、プレタポルテのスーツを取りだした。そして、現実のどこかに実在していてほしいクレナイを求めて、大都会の、どこかに存在するはずの、理想の裏街を求めて外出した。

街はいつも生きている。時代が変遷し、人々が様変わりしようとも、街は変化を

繰り返して、健気に生きている。人々に安息を与え、蠱惑に微笑んで、大胆かつ細心に人々を眩惑してくれる。やはり、私には裏街が相応しい。裏街に同化して、蠢き徘徊するのが、私の人生にはお似合いなのだ。

クレナイはしよせん夢にしか存在しない私のアニメ。理想のエロス。現実の生活において、私にめぐってくる女性といえば、肉感的で、コケティッシュな笑顔。鍍金のエロスたち。いや、むしろ私は、意識的にそのような女性を選び好みしている。おそらく私は、クレナイというアニメを、現実の中で見出し、穢すことを怖れているのだろう……。

歓楽街の、大劇場と封切映画館が立ち並ぶ目抜き通りの裏街に、轟々しいネオン・ランプの看板が目に入った。大型テナントビルにある地下劇場は、夢と現の、唯一の共通点だ。

『現代の阿国 ジプシー・スカーレット 今宵 特別出演!』

私は、クレナイの幻影を、単なるストリップ小屋の、陳腐なキャッチ・コピーに見出した。

夢の中のように、傍らの電柱に吐きかけられた酒粕色の嘔吐物は見当たらない。原色のネオンも、私の憂さを晴らせるほどおどけてはいない。くすんだガラス窓のチケット売り場に老女は座っていた。私を見て愛想笑いを浮かべるも、化粧っ気のない枯れた笑顔だ。私は劇場の暗闇にクレナイを求めて胸を焦がした。しかし現実は、夢とは異なるもの。ここにクレナイが、存在するはずがない。

私は入場せずに、ビルの裏手にある楽屋口へ回った。横柄に手をあげて守衛に挨拶した。

「大岡社長、毎度お世話になります。スカーレット様がお待ちかねです。さ、どうぞ中へ」守衛は愛想笑いを浮かべて、慇懃に楽屋のドアを開けた。私はチップとして千円札を彼に渡した。

私はジプシー・スカーレットの、楽屋のドアを二度ノックした。高音の明るい返事が聞こえた。解錠された数センチの隙間から、リリーの円らな黒い瞳が輝き、私を招き入れた。ドアを閉めるなり、リリーは私の胸に飛び込み、唇を熱く求めた。

「遅かったわね、直人。わたしはあなたのマーメイドよ」

クレナイの、切れ長の、鳶色の瞳は、私を柔和に捉えていた。いや、それは夢物語。

私の憧憬。私はいまだ夢現のままだ。現実には、リリーの、私を優しく見つめる円らかな黒い瞳。小麦色ではない、純白な肌の温もりは、リリーの愛ともいえる。

「リリー、お前はマーメイドなんかじゃないよ。おれのヴィーナスだ」私はいつものように嘘をついた。リリーは、マーメイドでもなければ、ヴィーナスでもない。マーメイドもヴィーナスも、それはアニマ、クレナイの代名詞。彼女は、今度、いつ、私の夢へ登場してくれるのか？待ち遠しい……。

「嬉しい！愛してるわ、ダーリン」リリーは私の胸に頭をもたげて、私の袖口から覗く、ダイヤモンド入りのカフ・リンクスをいじくった。

「あなた、いつもお洒落ね。大岡直人さん……」リリーは甘い声音で歌うと、物欲しげな視線を私に投げた。

「今日はビッグな海外物件を転売して、大儲けしたよ。バブル経済は崩壊したと言われて久しいが、どうして、まだまだ。巷にはビッグなビジネス・チャンスがごまんと転がってるぜ」

「やっぱり、不動産は永遠に不滅ね」

「そう願いたいね……」一抹の不安が私の脳裏をかすめた。

「土地神話の崩壊なんてあり得ないわ。人間にとって、お金以外の財産といえば、土地と宝石しかないもの」

「物質的には的を射てるな」

「直人のいじわる。信じて、あなたへの愛は不滅よ」リリーは、猫のように、私の腕に豊胸を擦りつけた。

「リリー、最近つくづく、不動産業は俺の天職だと実感するよ。やっぱり、起業してよかったとね」綱渡り状態が日常茶飯事の資金繰りに腐心する私は、挫けてはならぬ、と自らを勇気づけた。

「お金持ちになれたから？」

「それも一理あるが、社則や組織の制約もなく、自由気ままに、自分の狙ったビジネスへ思う存分に邁進できることが最高だな。ただし、自由の代償として、ミスれば、自らがすべての責任を負わねばならないがね。なあに、それは覚悟のうえで起業したわけだし、チャレンジのない人生なんて、君のようなヴィーナスに声もかけられずに、独り寝で自慰するようなものだ」私をあえて磊落に笑った。経営破綻という恐怖に四六時中怯える、卑小なおのれを笑い飛ばし、奮い立たせるために。

「冒険ばかりして、失敗しちゃ厭よ、ダーリン。でも、たとえあなたが無一文になっても、直人、わたしはあなたについて行くわ。本心からよ、信じてね」リリーは、私のダイヤモンド入りのカフ・リンクスを、なおもいじくり回した。

私はリリーの愛を虚ろに感じた。私は彼女の肉体のみを欲している。心を癒すのはアニメのクレナイ。いつの日か生成することを夢見て胸を焦がす……。

「さあ、今宵はキャビアとシャンパンで祝福だ。それに、ホテルのスイート・ルームも予約してある。今夜は、たっぷり楽しもうぜ」

「まあ、素敵」リリーは満面に笑みを称えた。

「その前に、リリー、君にもプレゼントを贈ろう。ダイヤがいいのだろうか？」私は、私のカフ・リンクスから手を放さない、リリーの指を撫でた。

「まあ、素敵！」リリーの円らな黒い瞳は燦然と輝いた。

私はリリーを強く抱擁した。情熱的に唇を吸うも、私の心はいまもおクレナイに奪われている。私は、いつかの日か、クレナイにめぐり逢えることを夢見て、明日も裏街を彷徨うはずだ。(了)

小林 英実

(こばやし ひでみ)



神奈川県在住

一九五六年北海道士別市生まれ。美幌・旭川・小樽等九市町村に明治大学文学部卒業
情報通信機器販売会社役員。起業経験あり。現在上海現地法人を兼ねる。